皆で話し合う　「マルコによる福音書（6）」

２００６・６・２８　畑野榮一

マルコによる福音書１章３５節～２章１２節

巡回して宣教する　（ルカ４：４２～４４）

３５朝早くまだ暗いうちに、イエスは起きて、人里離れた所に出て行き、そこで祈っておられた。３６シモンとその仲間はイエスの後を追い、３７見つけると、みんなが探しています」と言った。３８イエスは言われた。近くのほかの町や村へ行こう。そこでも、わたしは説教する。そのためにわたしは出てきたのである。」３９そして、ガリラヤ中の会堂に行き、宣教し、悪霊を追い出された。

内容は、前回の報告に記載済み。

らい病を患っている人をいやす　（マタイ８：１～４　ルカ５：１２～１６）

４０さて、らい病を患っている人が、イエスのところに来てひざまずいて願い、御心ならば、私を清くすることがおできになります」と言った。４１イエスが深く憐れんで、手を差し伸べてその人に触れ、よろしい。清くなれ」と言われると、４２たちまちらい病は去り、その人は清くなった。４３イエスはすぐにその人を立ち去らせようとし、厳しく注意して、４４言われた。誰にも、何も話さないように気をつけなさい。ただ、行って祭司に体を見せ、モーセが定めたものを清めのために献げて、人々に証明しなさい。４５しかし、彼はそこを立ち去ると、大いにこの出来事を人々に告げ、言い広め始めた。それで、イエスはもはや公然と町に入る事が出来ず、町の外の人のいないところにおられた。それでも、人々は四方からイエスのところに集まって来た。

先ず、現在のハンセン病　正式の学会の病名では現在も、らい病＝レプラですが）と、当時のらい病との違いを述べましょう。ハンセン病はらい菌の感染によって起こる伝染病ですが、当時の「らい」と言われた皮膚病は，近頃は「重い皮膚病」と記載されているように、ハンセン病以外のものも含まれておりました。唯ハンセン病もらいと称せられた皮膚病も、人間社会の差別の対象となった事は同じです。殊にイエス様当時の「らい」患者は、社会から締め出され、人々の憐れみにすがって最低の生活を続けるほかはなかったのです。道を行く時も「自分は汚れている。汚れている。どうぞ近寄らないで下さい」と呼ばわりながら歩かねばなりませんでした。イエス様でも他の病人は「いやす」と言う言葉を用いられたのに、らい患者は「清める」と言う言葉を用いられました。ハンセン病から治癒している元患者の方々にも、まだ差別は完全に取り去られていないと言う実情はあるのですが、イエス当時はとてもひどく、映画「ベンハー」でも見られた所ですが、我々と同じ人間と見られない社会に、この人たちを人間として迎え入れて下さった方・イエスが来られた、と言う事が大切です。

聖書でイエスが１０人のらい病人と出会われる所が、もう1箇所があります。「ルカによる福音書」１７章ですが、彼ら１０人ははるか離れた所に立ち、大声をあげてイエス様の注意をひこうとしました。汚れた者はイエスの前まで来れなかったのです。時は満ち、神の国は到来した」と宣言されているのに、救い主の前まで進み出る事は出来なかったのです。救い主の前からさえ自分を隔てなければならなかったところに、彼らの悲惨の極があったのです。私たちは礼拝で、神様の前に、救い主イエスのまん前に出て行くことができると言う幸いを持ちます。そしてこの独りのらい病人もイエスの許まで来ました。マタイ8章にも同じ話が載っていますが、当時律法では普通の人の前にらいの人は出られなかったのですから、マタイの作為で、そこには、山から下りてこられたイエスとらい病人が出会いがしらにぶっつかったように書いてあるのかも知れません。勿論そのように全く思いがけなく出

会いが起こったとも考えられますが、しかし、このらい病人の信仰が、離れた所から声をかけることに辛抱できなかったから、イエスの許に出てきた、と考えても良いと思われます。どちらにしても、イエスが彼を受け入れ、引き入れ、隔てを置く事を許されなかった、と言う事が根本にあるのではないでしょうか。神の子イエス・キリストと私たちの間には、らい病人でなくとも当然大きな隔たりがあります。私たちは 主よ、我を去りたまえ。我は罪多き者ですから」（ルカ５：８）と告白しないでは居れない者ですから隔たりがあっても仕方がないのです。私も、乳児を治療していて万策尽き、その臨終に祈って奇跡的な回復を見た時、主よ、離れてください」と祈った事があります。キリストの栄光と聖なる力が現れる時、み許に近づき過ぎたと感じてペテロのように畏れたのです。しかしその時、主ご自身が私たちに近づき給うのです。主の愛が、私たちを強く捉えて下さるのです。そして、私たち自身、又私たちの周囲の信仰の歩みを振り返って見ますと、私たちは集団の中の一人でありながら、孤独な単独者です。夫婦でさえ最後の場面では、主キリストと独りで対面するのです。いや、主イエス・キリストの目は、私独りに注がれているのです。私たちはひとりでに、礼拝の姿勢をとらざるを得ません。この人、一人のらい者もひざまづきます。御心ならば」と。彼は主の御意志を問うのです。主の御意志に一切が支配されているのです。主も、ゲッセマネの祈りにおいて、みこころのままに」と祈られました。私たちはともすれば、自分の願いにしがみつきますが、自分の意志を制御することも大切である事を学ばねばならないのです。私たちのそのような遠慮を乗り越えて、神様のご恩寵、イエス・キリストの愛と恵みは、働いて下さるのです。私たちの信仰、神に対する信頼において。

でも現代において果して信仰はあるのでしょうか。現代のただれ切った文明の中で。私たちはらい病にかかるよりもっと汚れているのではないでしょうか。最も大きな汚れは、拝金主義です。その底を支えている 自分さえよければ」と言う 自己中心」が根本問題。そして問題は現代に始まるのではないのです。人類の歴史と共に古い罪の問題があります。その罪ある人々に、主イエスが、わたしの十字架を信じなさい。わたしがあなた方の罪を、十字架の上で拭ってしまったのです」と言われます。それでも、私は特別深い罪を持っているから」と思い悩む人もいます。その時主イエスは、深く憐れんで下さるのです。彼――らい者――に触られたように、手を伸ばして、私に触って下さるのです。そして 私の意志である。清くなれ」と言われます。彼は先ず憐れみ給う。機械的にいやし給うのではなく、ご自身にその人の汚れを、病いを受け、担い給うのです。

まことに、彼はわたしたちの病を負い、
わたしたちの痛みを担った。だが私たちは思った。
彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。
しかし、彼は
わたしたちの背きの罪のために刺し通され、
わたしたちのとがのために砕かれた。
彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、
彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。（イザヤ５３：４～５）

一方、イエスは、やみくもに律法を破られる方ではないのです。ちゃんと秩序はお守りになる。清められたその患者を律法どおりに祭祀の所に行って、清めの儀式を受けるように指示されるのです。所がこの人は自分が人にちやほやされることだけを望み、イエスの望みである宣教の事を考える事が出来なかった。つまり彼の 自分が救われた」ことの言い広めはユダヤ当局に、イエスは民衆を扇動する者ではないかと疑われ、イエスは町に入り会堂で公に宣教する事が出来なくなるのです。私たちの信仰にも拘わらず、私たちにも宣教を妨げる要素が往々にして無意識に出てくるような事がないように留意すべきですね。

2

中風の人をいやす　（マタイ　９：１～８、ルカ　５：１７～２６）

1数日後、イエスが再びカファルナウムに来られると、家におられることが知れ渡り、2大勢の人が集まったので、戸口のあたりまですきまもないほどになった。イエスがみ言葉を語っておられると、3 4人の男が中風の人を運んできた。4しかし。群集に阻まれて、イエスのもとに連れて行くことが出来なかったので、イエスがおられるあたりの屋根をはがして穴をあけ、病人の寝ている床をつり降ろした。5イエスはその人たちの信仰を見て、中風の人に、『子よ、あなたの罪は赦される』と言われた。6ところが、そこに律法学者が数人坐っていて、心の中であれこれと考えた。7『この人は何故こういうことを口にするのか。神を冒涜している。神おひとりのほかに、いったい誰が、罪を赦すことができるだろうか。』8イエスは、彼らが心の中で考えていることを、ご自分の霊の力ですぐ知って言われた。何故、そんな考えを心に抱くのか。9中風の人に『あなたの罪は赦される』と言うのと、『起きて床を担いで歩け』と言うのと、どちらが易しいか。10人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう。」そして、中風の人に言われた。11『わたしはあなたに言う。起き上がり、床を担いで家に帰りなさい。』12その人は起き上がりすぐに床を担いで、皆の見ている前を出て行った。人々は皆驚き、『このような事は、今まで見た事がない』と言って、神を賛美した。

イエスがカファルナウムに帰って来られたのは、安息日ではありません。だから人々は会堂ではなく、シモンの家に集まって来ました。イエスがそこに居られるなら、生けるキリストと会う事が出来るなら、立派な会堂でなくてもよいのです。この時人々はイエスのみ言葉を聴いたのです。イエスその人に期待はかかっていました。キリストこそお語りにならねばならなかったのです。この間のマルコ教会の信徒会で、木村司祭様が「一番大切な事は、心を尽くして聖餐式に連なることだ」と最後におっしゃいました。イエス・キリストの肉である言葉を食べて養われ、イエス・キリストご自身である血を頂いてキリストに同化すること、聖餐式でキリストこそが語られ、出会わねばならないのです。イエスはご自分の言葉を語り給うのです。私たちは教会から出てゆく時、その福音を語り伝えるようになる筈です。何故なら、福音は語られ宣べ伝えられねばならないと言う性質（喜ばしい便りである、と言う性質）を与えられているからです。キリストの言葉を与えられねば、人間は回復しないのです。それによって和解が来、それによって召しが起こり、それによって潔めが起こるのです。

ぞこ（別の目的を持った４人の人々が戸板に乗せた１人の中風患者をつれて到着します。彼らは遅すぎた。もうそこは一杯です。キリストとの出会いは何時でも会えるといったものではありません。彼らにはこの機会を逃さないと言う決断が必要です。この人たちは引き下がらなかった。非常識にも、屋根の上に上って、屋根をはぎにかかったのです。私は始めてここを読んだ時、あきれました。世の中には秩序と言うものがある、イエス様もその事が大切であると知っておられる筈だ。何故このような事を許されたのか、と思いました。今は、この事を肯定できます。恵みの失われた時に、その時のうちにあって、恵みを獲得しようと彼らは決心したのです。凄まじいキリストへの肉薄を始めたのです。これが信仰です。マルコ教会は、嬉しいことにこの肉薄が起こっています。沢山の方々が洗礼によってイエスに肉薄始めておられます。目的は手段を正当化する、と言う言葉がありますが、如何に崇高な目的でも、何時でも神の栄光を表すとは限らない。何故かと云うと、必ずその目的手段の中に自己実現を含んでいるからです。唯ひとつ、キリストの前に出るためであるなら、屋根をはぐことも許されるのです。キリストの前に自分を差し出すとは、キリストによってのみ救われる罪びと、全く無価値な者、無能力者と自分を認め、自己実現といった目的が自分にない事は明らかだからです。キ

リストに接近することに私たちはもっと強引になるべきです。そうすれば、イエスが私たちの信仰を認めて下さるのです。しかしこの人たちは本当に信仰があったのでしょうか？病人をイエスに会わせて癒して頂こうとする熱心さの事が、果たして信仰と言えるかどうか？でも、わたしたちの目からは信仰だと思ってはならないような判断を尚　信仰だ」と拾い上げてくださる方、イエスがおられるのです。私たち自身が　信無き我」として進み出ざるを得ないような時、彼は私たちの信仰を見てくださいます。ここでも彼らの信仰を見られた、と書いてあります。彼らとは、勿論この連れてきた一団です。つり降ろされた人ひとりをさすのではありません。それでもこの一団の信仰を代表するのは？イエスは、中風の者にお言葉を与えておられるのです。その人の信仰が、あなたの罪は赦された」との宣言を受けたのです。ですから、私たちも、ひとりの人間をキリストの許に送り込むように励ましを受けるのです。病人が居るから、信仰が成立するのではないのです。キリストが居られるから信仰を取り上げて下さるのです。今日もその事が起こっています。

もう一つ私ははっきり分からないことがあったのですが、イエスの　子よ、あなたの罪は赦された」　起きて歩け」とどちらが容易いか、と言う問題です。今度勉強してやっと分かりました。　罪が赦される」と言う事は神の権限で、地上の人間は誰も権限を持っていない。その通りである。そして罪が赦される事は、地上の人間に目に見える形で証明することはできないが、体の麻痺した人に、おきて歩め」と言うことはそれより易しいことか？あなた方はそれが出来るか。出来ないであろう。どちらも人間には出来ないことである。そうならば、もし私がこの体の麻痺した人を歩かせるならば、人間を超えた権威がここに働いている事を知らねばならない。その人間を超える権威がこの人の罪が赦されている事を宣言するのである、と言っておられる。　罪が赦された」、と言っても、目に見える、何も起こらなくてもいいのです。その人の内部で起こっていることとごまかす事が出来るが、起きて歩めと言って歩く事が出来なければ、明らかに力を持っていないことがばれるから、起きて歩けと言う事が実行できれば、本当はその方が易しいのだが、人の子　イエスのこと）が神の子としてその権威を持っている事が分かるように、　起きて歩め」と言われたのです。そしてそれは実行されました。

罪とは本質的に神に対するものですから、赦しは神自身から来ます。しかし、人が勝手に　赦しの神」と定義する事は出来ないのです。神には①、赦さずに置く自由。②、３・４代までむくいを及ぼす自由、があるのですが、私たちは神が怒りよりもむしろ慈しみに傾いておられる事を知っています。

神は、モーセにそのように言われました)。だが、肉体を取って人に近づき給う神においてこそ、神は赦しの神としてのご自分を、残りなく顕されるのです。そのような受肉の神であるご自分をイエスは、人の子と言われます。その、人の子の、赦しのことばによってその人は起き上がり、自分の布団を背負って家に帰ります。そこに残ったのは、人間達の驚きと賛美です。

罪の赦し」。それは法廷の無罪判決ではない。それは人間の一切の反逆とは違反を超えて、恩寵の故に、無条件で交わりを与えられる神の行為である。罪無き神の子キリストが世の罪を負う神の小羊として死なれた。罪の贖いを成し遂げられた。この十字架の出来事自体が神の言葉である。この終わりの時に、神は御子キリストの十字架によって世界に呼びかけられているのである。

わたしはあなた方の罪を赦している。わたしのもとに立ち帰って、わたしとの交わりに入り、わたしの生命を受けなさい」と。　市川喜一師著　「マルコによる福音書講解」より）

この所は、イエス・キリストが　赦しの王国」が始まった事を宣言しておられるのです。　我らの罪を赦し給え」と祈るように教え給うた彼は、その願いに　われらに罪を犯すものを我ら赦すごとく」と言う言葉を結び つけよと命じ給います。福音の宣教には必ず罪の赦しが結び ついている事をしっかりと理解したいものです。赦しが始まった事は、終末が始まったことです。